

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教 育 学)	氏名	保森 智彦
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
教師の熟達化に及ぼすマトリクス省察法の効果			
論文審査担当者			
主 査 教授 岡 直樹			
審査委員 教授 井上 弥			
審査委員 教授 栗原 慎二			
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、現職教師や小学校教員を目指す学生を対象とし、Shulman (1987) の「授業を想定した内容に関する知識」(pedagogical content knowledge, 以下「PCK」) の観点から、教師の適応的熟達を支援する方策を実践的に検討したものである。</p> <p>論文の構成は、次の通りである。</p> <p>第1章では、教師に求められている探究力や教師中心思考による学習指導といった、学校現場の今日的課題について触れた後、PCK や適応的熟達に関する先行研究を概観し、本論文に与える示唆と問題点等についてまとめている。そして、PCK と熟達の関係性を明らかにすることが教師の適応的熟達に資することを述べた上で、本論文の目的について説明している。</p> <p>第2章では、経験年数の異なる複数の算数の指導者を対象として、授業観察時の思考活動を調査し、PCK を構成する3つの知識(教材内容、子ども、指導方略についての知識)の違いを明らかにしている(研究Ⅰ)。また、教師は経験年数に伴い、「一般化をいかに教えるか」から「一般化の仕方をいかに教えるか」そして「教材を通して児童の何を育てるか」、「なぜこの教材を教えるのか」というように、その視点が変化し、児童理解や指導方略についての知識と関連付けていることを明らかにしている。そして、経験によって教師の PCK はより密接に関連付けられ、精緻化されると推察している。</p> <p>第3章では、経験年数の異なる複数の算数の指導者を対象とし、授業観察ではなく、授業中および省察時の思考活動を調査し、PCK を構成する3つの知識の違いを検討している(研究Ⅱ)。そして、教職5年目の教師は、教師中心の発話が多いが、22年目の教師は学習者中心の発話が多いことを明らかにしている。また22年目の教師は、「教材を通して育てたい見方や考え方は何か」という視点で児童の思考過程や支援方法を関連付けて省察していたが、5年目の教師と13年目の教師は、この省察の視点については言及がなかったことから、PCK には教師中心の PCK と学習者中心の PCK の2側面が存在するのではないかと示唆を得ている。</p> <p>第4章では、研究Ⅰと研究Ⅱの知見に基づいて、教師の適応的熟達化を支援するためのツールとして省察マトリクスを開発している。研究Ⅰと研究Ⅱで明らかになった PCK の2側面は、このマトリクスの縦軸(学習者の自律性の3段階)として反映されている。また、前述の経験年数に伴う「一般化をいかに教えるか」から「一般化の仕方をいかに教えるか」そして「教材</p>			

を通して児童の何を育てるか」、「なぜこの教材を教えるのか」という視点の変化は、マトリクスの横軸（効率性の3段階）として反映されている。

第5章では、省察マトリクスの効果を検証するため、中堅教師および初任教師の授業中や省察過程に現れる省察マトリクス活用前後の思考活動を比較している（研究Ⅲ）。調査の結果、省察マトリクスを用いた省察法により、学習者の「個性」と「自律性」の伸長といった視点で2人の教師のPCKを構成する3つの知識に変容が見られた。しかし、元々、学習者中心のPCKを持っている中堅教師は、半年が経過してもマトリクス省察法の効果は持続するが、そうでない初任教師はその効果が持続しないことが明らかとなった。

第6章では、研究Ⅲでマトリクス省察法の効果が見られなかった初任教師を対象に、算数および算数以外の授業中や省察過程において省察マトリクスの効果を検証している（研究Ⅳ）。この初任教師は、学習者中心のPCKと教師中心のPCKをバランスよく持っていなかった。そのため、マトリクス省察法とコーチングを組み合わせで適用している。そして、半年が経過しても学習者中心のPCKが維持されることを明らかにしている。さらに、算数以外の教科においても、マトリクス省察法とコーチングの組合せによって学習者中心のPCKが維持され、授業が変わることを示している。

第7章では、総合考察を行っている。本では、教師のPCKを構成する3つの知識（教材内容、子ども、指導方略についての知識）の質の違いを明らかにし、教師の専門性の中心概念であるPCKと適応的熟達との関係を明らかにしている。そしてこれらの知見から省察マトリクスという省察ツールの開発を行い、経験の浅い教師でも適応的熟達化に向けて授業を変えることを示している。本章では、マトリクス省察法の効果について、PCKと適応的熟達化の観点から教育心理学的な考察を行っており、経験の浅い若手教師でも、熟達教師の存在の有無に関係なく、省察マトリクスを用いることによって自身の熟達レベルをメタ認知し、確実に授業を改善することができるという実践的な示唆が述べられている。また、省察マトリクスを用いた校内研修を行うことで、教師間の教育観や指導観の見直しの機会を提供し、学校全体が適応的熟達化に向けて成長するという示唆が述べられている。一方、省察マトリクスによる教師の変容に伴う学習者の変容の分析の必要性を課題として示している。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. まず、教師の適応的熟達化を支援し授業を改善するためのツールとして、容易に利用できる省察マトリクスを開発した点をあげることができる。
2. そして、この省察マトリクスの効果を実証した点からも、本論文は高く評価できる。
3. さらに、この省察マトリクスをより効果的に活用するための方法として、コーチングとの組み合わせを提案し、実証している点でも高く評価できる。

このように、教師の熟達化を支援する方法を実証しながら提案している点で、本論文は非常に優れているといえる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成30年2月10日